

大学院教育支援機構 企業寄附奨学制度（DDD） 報告書

氏名	大角康
研究科・専攻	経営管理教育部経営管理専攻
修士/博士・学年	専門職学位課程・1年生
支援企業名	(株)UACJ様

・提出期限：2025年3月28日（金）17：00

- ・ページ数に制限はありません。
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。
- ・各項目について具体的に記述してください。
- ・大学院教育支援機構のウェブサイト公開します。

奨学金を得て行った研究の成果

いかなる企業も利益をあげねば生き残れない。だから企業経営において“well-being = 幸福”の問題は、安定した財務基盤を持つ企業だけが追求することを許される、ぜいたく品のような扱いを受けてしまうが、ここにこそまさに企業経営と人生の間の軋轢が生まれる要因がある。アリストテレスが「ニコマコス倫理学」で論じるように、すべての者は何らかの形で幸せであるために生きていると指摘できるにもかかわらず、すなわち人は幸せであることを人生の目的に据えて生きる指摘できるにもかかわらず、企業経営ではこの第一義的な目的が、あたかも二義的なものかのように見られがちとなるのである。

「利益確保こそ幸福追求の条件となる」という考え方が、企業経営の文脈において採用され続ける限り、企業がどれほどwell-beingに言及しても、その言及は美辞麗句としての役目を果たすのみとなり、企業のあり方をその根本から規定する力を持つことはない。

企業経営の文脈においても幸福追求が第一義の地位を占めるには、幸福追求のプロセスが、利益獲得のプロセスそのものと捉えられる必要がある。幸福の追求と利益の追求が別の営みと見られた場合、利益をあげねば生き残れない企業としての性質上、どうしても後者が優先されてしまうため、企業経営の文脈においても幸福追求を第一義に据えようと思うなら、両者をまるでコインの表裏のように、同じ営みを別の面から眺めたものとする必要があるのである。

このような見方を可能にする理論的基礎を哲学史上に求めた際、先に挙げたアリストテレス「ニコマコス倫理学」は有力候補のひとつとなる。彼によれば幸福とは、何らかの結果のことではなく、何らかの結果の達成に向けて動くプロセスそのものである。彼の考え方によれば、プロセスの中で常にすでに幸福を感じているからこそ、幸福な者は災難や不運などによって思う結果に恵まれずとも幸福であり続けやすいと言え、そのプロセスを実行するに最適な習慣を自ら進んで培うことにもなると言える。

「倫理性」や「人となり」など、広い意味での「倫理」を意味する「エトス」は、「習慣」または「習慣づけ」を意味する「エトス」から派生したと同書で述べるアリストテレスは、倫理的特徴（徳）の形成において習慣を重要視するのだが、「好きこそもの上手なれ」と言うように、好んで取り組む活動（幸福を感じる活動）ほどおのずと習慣となりやすく、それが一度習慣となれば、その習慣に紐づく技術はその水準が高まりやすいと言えるだろう。

どんな活動をするにせよ、成果を出すには高い技術が求められる。高い技術は一朝一夕では習得できず、その習得のためにはそれに紐づく活動を長きにわたり習慣的に継続していくしかないが、人が長きにわたって継続できる活動とは、好き好んで行う活動のみと思われる。好まない活動を習慣的に長きにわたって継続することも可能だが、その際には強い意欲を保ち続けることはできず、ましてやそのプロセスの中で幸福を感じるなど望むべくもないと言える。

人が長きにわたり強い意欲で取り組み続けられる活動とは、まさにそれを行うことで幸福である（幸福になる、ではない）ことができるような、好んで行う活動のみと言えるだろう。このように考えるのなら、企業がその経営において他社に対する優位性を獲得するための戦略であるいわゆる「競争戦略」を、単に利益獲得のための行動計画/資源配分/領域設定と見る

のではなく、その企業に属する人々が、その活動の成果によってではなく、その活動のプロセスにおいて常にすでに幸福である活動だけに企業活動をできるかぎり限定し、その限定により他社では到底獲得できない技術上の優位性を獲得するための行動計画/資源配分/領域設定と見直すことができると思う（このような競争戦略を採った組織の実例として、サウスウエスト航空および私立横浜創英中学高等学校を例示した）。

競争戦略のこのような捉え直しにより、利益の追求を幸福の追求そのものと見ることが可能となり、私たちが自らの人生を生きる際には第一義であるはずの“well-being = 幸福”の問題を、企業経営の文脈においても第一義的な問題として論じることが可能になると考えられるようになった。

産学協同の取組における成果

「役に立たない」と見られがちである哲学のイメージを一新し、「哲学による社会貢献の新たな道を拓くこと」を目標にして経営管理大学院に入学した私にとって DDD に応募することは、私が考えていることが机上の空論などではなく、実際の企業活動の中で悪戦苦闘されている方々に興味深いかどうかを試す絶好の機会となりました。DDD への応募を試金石と見た私は、採択通知を受け取った際、自らの問題意識の価値を現場の方にも認めていただいた思いがし、胸がいっぱいになりました。

研究成果発表においても（株）UACJ 様より、「実に興味深かったです。研究の続きをこれからも伺ってみたいです」との温かなお声がけを頂戴し、今後の励みとなりました。本年のご恩に報いるべく、研究活動のみならず、哲学コミュニケーターとしての活動にもさらに拍車をかけ、哲学による社会貢献の道をさらに拓いていきますよう、精一杯尽力してまいります。

今後の展望

本研究では文献研究としての哲学史研究を、アリストテレス哲学を介し、企業が実際に行ってきた競争戦略に結びつけることができました。しかしながらこの研究を学会で発表するには至っていないため、今後においては研究成果を多くの方にご覧いただけるようにするべく、学会発表に漕ぎ着けることを目標としたい。

経営学と哲学を結び付ける試みの数は、日本においてはまだそれほど多くないために、上記の目標を実現できた暁には、経営学/哲学両界において新たな領野を拓くことにもつながっていくと思われる。